



トッコ著「聖トーマス・アキナス傳」の源泉

五百簀頭, 眞治郎

(Citation)

国民経済雑誌, 60(3):311-325

(Issue Date)

1936-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00054985>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00054985>



論 說

トッコ著「聖トーマス・アキノナス傳」の源泉

五百旗頭眞治郎

はしがき——聖トーマス・アキノナスが、近時種々なる方面より關心の的とせらるるに到つたことは、注目すべき顯著なる現象なりと云はねばならぬ。彼は唯に哲學神學の方面より研究せらるるに止まらず、また社會學、經濟學、法律學、其他多くの學的地位より考察せられてゐる。

筆者もまた聖トーマスの學問を考究せんと志すものであるが、既に繰返し述べたる如く、彼の「學問的性格」を理解するためには、まづ彼の生活、特に彼の聖者的生活を充分に認識することが前提條件をなすものと考へる。この意味に於て、筆者はさきにトーマスの傳記史料に關し些か批判を試みた（拙稿「碩學中の聖者トーマス・アキノナス」神戸商大創立三十周年記念論文集、同「トッコ著『聖トーマス・アキノナス傳』批判」國民經濟雜誌第五九卷第六號）。本篇に於ては、聖トーマスの生活を知る上に最も重要な總和的傳記史料たるトッコの「聖トーマス・アキノナス傳」に關して、其の源泉を明にして見たいと思ふ。

聖トーマス・アキノナスの傳記を書くに當り、トッコの利用した源泉的資料は、之を（一）書き物の形態を備へてゐない著者の目撃並に他人の證言と（二）既に書き物となつてゐた他人の著述の二つ

に分つことが出来る。

一

一 トッコ著「トーマス傳」の源泉は、一部分彼の自ら目撃したところに發してゐる。彼はナポリに於て行はれたトーマスの諡聖調査に際し、次の如き證言を提出した。

「私は、トーマス修士が、哲學に關する彼の最後の勞作と思はれるアリストテレスの *De generatione et corruptione* の註釋(註一)に筆を染めて居られるのを見た。また彼の説教と講義にも列したが、その説教には多數の民衆が集まり來つて熱心に耳を傾けてゐた。彼は柔和謙遜で俗事を輕んじた。また清淨潔白で、一般に言はれてゐるところによれば、彼は生れたままの童貞を守り通したとのことである」(註二)。

トッコが諡聖調査に於て、トーマスに就き直接自ら目撃したこととして立證してゐるところは右に盡さる。ペルスターの言ふところによつて見ても、トッコの自ら目撃したことは大體これ以上に出ないものの如くである(註三)。尤もトッコはトーマスの晩年、即ち一二七二年から七四年まで、ナポリに於てトーマスと同じ修道院内に起居した。従つて彼は直接の経験よりトーマスの生活に關し、更に多くの立證をなし得るが如く考へられるかも知れない。然し當時トッコは恐らくは未だ三十餘才の無官の修士であつたらうと思はれる。これに反し、トーマスは歐洲に冠たる大碩學として、ひたすら研

究と祈りに没頭してゐた。従つて互に親しく接する機會は、トッコがトーマスの秘書役として彼の學問的勞作の手傳でもしない限り、少なかつたに相違ない。而も彼にかゝる役目が課せられて居たと思はしめる如き痕跡はいづこにも見出すことは出来ない。かかる點より見ても、トッコの「トーマス傳」の源泉的資料は殆んど全部他人の證言と報告に依存したものと云はねばならぬ。以下トッコに此等の證言報告を提供した人々を順次明にすることとしよう。

(註一) 茲にトッコの言及してゐる *De generatione et corruptione* の註釋(ヴィヴェス版トーマス全集第二三卷二六七—三八六)は、レオ版のトーマス全集が出版せられる時まで(一八八六年)全部トーマスによつて完結されたものの如く信ずる人が多かつた。然し古人によつて掲げられてゐるトーマスの著書目録には、未完結なる旨を明にしてゐるものが少くない。例へばトロメオ・ダ・ルッカの目録(Mandonnet, *Des écrits authentiques de S. Thomas*, 1910 p. 61)には「未完結」と附記されてゐる。また該聖調査のときに教皇に呈出されたオフィシャルな目録(*op. cit.* p. 31)及びジョヴァンニ・ダ・コロンナの目録(*op. cit.* p. 98)等には、同書第一卷(*super primum librum*)の註釋となつてゐる。のみならずオックスフォードのメルトン・カレッジにある手寫本(cod. 374)によれば、同書の第一卷第十七講(*lib. I. lect. 17*)の終りにある *et finaliter corruptetur vinum, et fiet totaliter aqua* と言ふ *desinit* (結びの句)の次に、左の如き注意書が記されてゐる。「このトーマス・アクィナス修士の敘述は終り、ストーナのトーマス修士の敘述が始まる(Hic terminatur expositio fratris Thomae de Aquino et incipit expositio fratris Thomae de Suthona)」と。故に私はグラウン・ペンと共に *Sicut tradit Philosophus in tercio De Anima, scientiae secantur quemadmodum et res, et incipit* (書き出しの句)(*Ed. Vivès Tomus XXIII p. 265*) である右の *desinit* (結びの句)(*op. cit.* p. 314) まづがトーマスの筆になつたものと信ずる。また第一卷第十八講より第二十五講まで、及び第二卷全部はストーナのトーマスによつて書かれたもののように考へられる。尤も此點に就ては Trevet (一三二八年死亡)のトーマス著書

目錄 (Mandonnet, op. cit. p. 49) に、トーマスが恰も全二卷の註釋をした如く思はしめる句 *De generatione et corruptione, libros duos* がある。またマインドヌネの如き現今有數の權威者も、今は知らぬが少なくとも一九二一年四月までに關する限り、トーマスが全二卷の註釋をしたものと信じてゐた。尙これらの問題に就ては上掲引用書の外に次の著書を參照せらるべし。

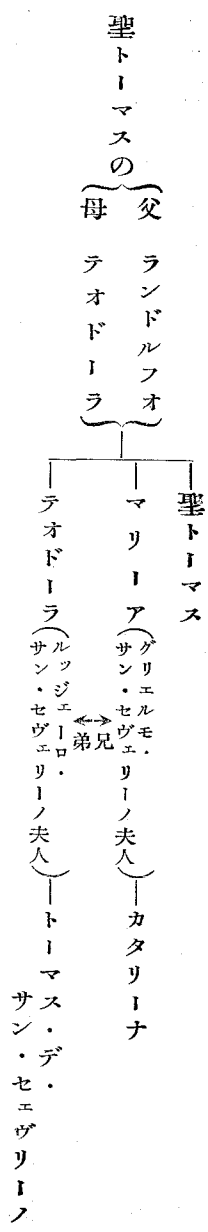
Grabmann, *Die Werke des hl. Thomas von Aquin*, 1931, S. 264 f.

Mandonnet, *Bibliographie thomiste*, 1921, p. XX.

(註二) ラテンの原文ではトッコの證言は三人稱で書かれてゐるが、茲では便宜上一人稱に改めて翻譯した。(Processus, n. 58)

(註三) Feister, *Die älteren Biographien des hl. Thomas von Aquino*, *Zeitschrift für katholische Theologie*, 1920, S. 383.

二 トッコは彼自らも言へる如く、トーマスの血族より源泉的資料を得た。トッコは、一三二七年の十一月頃から、アブルツチ (Abruzzi) 地方に住むトーマスの末の妹テオドーラ (ヨーロッパに於て屢々其例を見る如くトーマスの母も同じくテオドーラ Teodora と言ふ名の人であつた) の子、マルシコの伯爵トーマス・デ・サン・セヴェリーノの家を訪れたのであつた。そしてトッコは先づ伯爵よりトーマスに關する證言を得た。のみならずそこでトーマス・デ・サン・セヴェリーノのいとこであり、また聖トーマスのもう一人の女きようだいのマリリア (Maria) の息女たるカタリーナ (フランチェスコ・ダ・モーラの夫人にして當時既に老齡に達して居た) にも遇ふことが出來た。斯くしてトッコは彼女からも種々聖トーマスに關する證言を聴取した。聖トーマスには兄弟六人と姉妹五人あつたが、右に引用した人々とトーマスとの關係を表示すれば次の如くなる(註)。



(註) Processus n. 60, 62, etc.; Tocco, Vita S. Thomae (Prümmer 版) c. xxxvii; Pègue et Maquart, Saint Thomas, Sa vie par Tocco. c. XXXVIII; Scandone, La vita, la famiglia e la patria di S. Tommaso (S. Tommaso d' Aquino, Miscellanea storico-artistica, 1924)

三 聖トーマスと同じドミニコ會員で、各地の同會修道院に於てトーマスを知り、または彼と親しく交り、或はトーマスの傳記史料を集めなどした人々の證言は、トッコの著述の有力なる源泉的資料を構成した。これはナポリの謚聖調査に於ける彼の證言に徴しても明である(註一)。そのうち最も重要なのは、レヂナルド・ダ・ビペルノ (Reginaldo da Piperno) 及びトロメオ・ダ・ルッカ (Tolomeo da Lucca) の證言である。レヂナルドは後に述べる如く、トーマスに最も近く仕へた重要人物である。またトロメオと聖トーマスとの重要な關係、及びトロメオに聖トーマスの傳記を含む著述あること等には既に別の機會に於て述べた(拙稿「碩學中の聖者トーマス・アクィナス」神戸商大創立三十周年記念論文集一七〇頁以下参照)。尙ここに一言次の事實に注意しておきたい。即ちそれはナポリに於ける謚聖調書中にあるトッコの證言を読めば、ドミニコ會修士ペトルス・デ・セシア (Petrus de Setia) もトッコに重要な

る證言を與へた人となつてゐると云ふことである(註二)。然しこの事實はトッコが其後自著「トーマス傳」に於て述べてゐる如く、ペトルスと上述のレヂナルドを混同したものである(註三)。

(註一) Processus, n. 58—65.

(註二) Processus, n. 58.

(註三) ナボリの證聖調査當時に於けるトッコの記憶に従へば、聖トーマスの葬儀に際し、弔ひの説教をしてトーマスの終生童貞(肉體的精神的童貞を含む)を證言した人は、英國ドミニコ會の Procurator ペトルス修士(Fr. Petrus de Setia)のように思はれてゐた(註二參照)。然るに、トッコのトーマス傳には次の如く記されてゐる。即ち、彼が證聖促進のためアヴィニオンへ再度の船旅をしたとき、トーマスが夢に現はれたので、「私はあなたの全生涯にわたる傳記をお書き致しました。そのうちの或る感歎すべき一事につき、私はそれが果して事實と全く一致してゐるか否かを知りたいと存じます。あなたは御永眠の時まで、ペトルス修士が説教せられた如く、生れたままの童貞を守り通されたので御座いますか」と、トッコはかく尋ねた。そのときトーマスはその讃辭に少し羞かむが如き様子をしたのち、その通りであるが、説教をしたのはペトルス修士でなく、私の伴侶レヂナルド修士であつた」と答えた(Tocco, Vita [Prümmer] c. xxviii; Pégue et Maquart, op. cit. c. xxix)。

四 トッコはトーマス臨終の場所であつたフォッサノヴァに於けるチステルチェンセ會修道院の多數の修士たちよりトーマスに關する資料を得た。彼は一三一九年四月より約四ヶ月間にわたり同修道院に滞在して種々調査するところがあつた(Processus, n. 63, 64; Janssens op. cit. p. 466)。

五 トッコは、聖職に身をあかぬ多數の普通人からも種々證言を聞いた。就中最も重要なのはバルトロメオ・ダ・カプアの證言である。バルトロメオがトッコにとり重要な證言者であつたことは、證

聖調書に於けるトッコ及びバルトロメオの證言、並に後者の人物・職業・業績等を知れば容易に想定し得ることと思ふ。トッコの證言中には大要次の如き意味の句を讀むことが出来る、「トーマスを知り、彼と生活を共にした多數の人々、殊にレヂナルド修士及びバルトロメオ・ダ・カプアから、私は同様のことを聞いた」と(傍點筆者) (……et audivit etiam dici, et referri praedicta a pluribus Religiosis et secularibus antiquis, qui eum cognoverunt, et conversati fuerunt eum eo, et specialiter a supradicto Fr. Reginalds, et a Domino Bartholomeo de Capua…….Processus n. 59)。また他方に於て、バルトロメオがジョヴァンニ・デル・ジューデイチェからトーマスに關する重要な事實を聞いたとき、彼は「それを出來得る限り速にグリエルモ・ダ・トッコ及びそのほか多數のドミニコ會修士に知らせた」と語つて居る (……et dictus festis haec revelavit et dixit, quam cito potuit, Fr. Guilhelmo de Tocco, et pluribus aliis Praedicatoribus…….Processus, n. 79)。かくの如くバルトロメオが特にトッコをとりたてて名指してゐる事實は、先に引用したトッコの證言と相俟つて、バルトロメオがトーマスに關し、屢々トッコと話し合つたことを想像せしめる。バルトロメオは一二四八年カプアに生れた人で、トーマスが晩年ナポリで講義した頃は同地で學生生活をおくつてゐた。彼は聖者の學說に深き感銘を得て其熱心なる信奉者となつた。一二七八年には國王カルロ一世より民法の教授たる資格を附與せられ、後には protonotario や logoteta(註二)の重職に就任した。彼はカルロ一世及びカルロ二世をして聖トーマ

スの屬するドミニコ會に厚意を持たしめ、また之を援助せしめた。彼は、トーマスを知りまたは彼と親交のあつた多數のドミニコ會修道士と親しき間柄にあつたので、此等の人々よりトーマスに關する種々の報告を得た。就中最も重要なのは次の三者の證言である(註二)。

(i) レデナルド・ダ・ピペルノ——トーマスの伴侶、

(b) ジョヴァンニ・ダ・サン・ジュリアーノ——トーマスのドミニコ會入會を許可した靈父、

(c) ジョヴァンニ・ダ・カイアツツォ——パリ及びナポリでトーマスと共同生活をなし、彼と親密

なる交りを續けた有力なるドミニコ會修道士、

多數の重要なドミニコ會修道士よりトーマスの話を聞いてゐたバルトロメオ・ダ・カプアは、平素から唯にトーマスの著書目録を作つてゐたのみならず、またトーマスの傳記史料をも集めてゐたもののやうに思はれる。それなればこそ、彼の作つた著書目録が、諡聖調査に於けるオフィツシアルな著書目録に採用されるほど立派なものとなつたのもあり、また諡聖調査に際し、早速トーマスの總和的傳記に近いものを證言として提出することが出来たのであらう。バルトロメオ・ダ・カプアがトツコに對し、諡聖調査に提出した證言の全部を語り傳へたか否かは疑問である。筆者には勿論全部を傳へたものとは信じられない(註三)。然しバルトロメオが、トーマスに關する多くの事實をトツコに告げたことは、既に述べた如く、想像するに難くない。

(註一) *logoteta* の字義——フイッカーによれば一〇三二年頃は *canciere* の官職を指した。またマイヤーに従えば、十二世紀の初頭頃は「直接王に報告し、王の決定事項を官房に取次ぐ官職」を指した。更に一一三二年頃には *logoteta* は *canciere* の下に屬する官職を意味したようである。バルトロメオの時代に如何なる意味に使はれてゐたかは遺憾ながら精確なる根據を持たぬ。然し大體上記の如き意味に使はれたものと思はれる。バルトロメオに關する記事には「非常に高いロゴテータの職」と云ふ字句が繰返されてゐる。尙この際、右の字義釋明につき種々便宜と助言を與へられた宮下孝吉教授に謝意を表しておきたいと思ふ。(Vgl. Ficker, *Forschungen zur Reichs- und Rechtsgeschichte Italiens*, I, Band, S. 325; Mayer, *Italienische Verfassungsgeschichte von der Gothenzeit bis zur Zunft Herrschaft*, 2. Band, S. 382 f.; Mandonnet, *Œuvres authentiques*, p. 29)。

(註二) Taurisano, *Discepoli e biografi di S. Tommaso*. (S. Tommaso d'Aquino, *Miscellanea storico-artistica*, pp. 155—158); *Processus* n. 76—84; Pelster, *Die älteren Biographien*, S. 389 f.

(註三) バルトロメオ・ダ・カプアは謚聖調査に提出した證言の全部をトッコに傳へたとは思はれない。今その理由の一つをここに略述しよう。

聖トーマスは、成年期に達した頃、一切の世俗的榮華をはなれ専ら祈りと研究の生活を營むため、ドミニコ會にはいることを堅く心に決してゐた。然し彼の父は、トーマスを將來もつと榮職に就かしめ、且世俗的權勢をも振はしめたいと冀つてゐた。そこで彼はトーマスの意志を覆すため、トーマスを年餘にわたり自分の城に監禁したのであつた。然しトーマスの意志は牢として動かなかつた。——ここまではすべての傳説が一致してゐる。然しトーマスが終に父の許諾を得て素志を貫徹するに到つたか、それともみづから父の監禁を脱出したかの點に就ては傳説は分れる。

バルトオ・ダ・カプアに従へば、トーマスの父は母方の切願にほだされてトーマスに自由を與へた。そしてこの事實はジョヴァンニ・ダ・サン・ジュリアーノ(トーマスにドミニコ會入會を許可した靈父で、時々監禁中のトーマスを訪れた修道士)によつて、ナボリのドミニコ會修道院に傳へられた。これは同修道院の内外に於て等しく認められてゐるところである(*Processus*, n. 76)。

次にトツコによれば、トーマスは城壁に綱をおろして脱走してゐる。此點トツコはトロメオ・ダ・ルツカ説に依存し (Vita di S. Tommaso scritta da fra Tolomeo da Lucca, Taurisano, op. cit. p. 183) トーマス・カンティブラダーヌスに近づいてゐるやうである (Pelster, S. J. op. cit. S. 389)。

思ふにトーマス・カンティブラダーヌス、及びトロメオ・ダ・ルツカの系統に屬するトツコの説は、恐らく事實を多少ドラマティックに傳へた世評に基礎をおいてゐるもののである。之に反し、バルトロメオ・ダ・カプア説は傳説を初めて産んだ源泉的な場所と人に其根據を求めてゐる。私はバルトロメオ・ダ・カプアがナボリのドミニコ會修道者たちと親密なる關係にあつたことをも併せ考へ、彼の説により多くの信頼を持つ。トツコがバルトロメオ・ダ・カプアの説を採らず、巷説を根據として採り入れたのは、バルトロメオ・ダ・カプアより上述の話を聞かなかつたためであると思ふ。

二

一 トーマスに關する諡聖調書、殊にナボリに於ける諡聖調書が、非常に有力なるトーマス傳記史料なることは別の機會に於て述べておいた (前掲記念論文集一七四頁以下參照)。さて茲に問題となるのは、トツコがこの諡聖調書を利用したかどうかと言ふ點である。諡聖調書の公開は、證言者又は其他の現存者の名譽に關することもあり得るので一般に許されてゐない。のみならずトツコは諡聖調査を敎皇に申請してその裁可を得た人ではあるが、敎皇によつて任命された諡聖調査委員ではなかつた。故に彼は諡聖調査に於て、自ら證言を提出する地位には立つたが、公式に證言を受理する地位には置かれてゐなかつたのである。従つてこの點から見ても彼は諡聖調査を讀まなかつたものと思ふ。今假に彼の

ため特にその閱覽が許されたとしても、次の事實はこの假定を覆すものと言はねばならぬ。

(a) ジョヴァンニ・コッパ・ダ・ナポリ (Giovanni Coppa da Napoli) は、その實兄ボノフィリオ・ダ・ナポリ修士 (Fr. Bonofiglio da Napoli) と共に、トーマスの頭上に強い光の星が輝いたことを目撃した。彼がこの事實を謚聖調査に於て供述したことは同調査に明である(註一)。然るにトッコによればボノフィリオが座をはずして居た間に、コッパが之を見たことになつてゐる(註二)。若しトッコが謚聖調査を讀んでゐたならば、必ずや證據力の最も強い目撃者の證言を採用したであらう。従つて右の如き謬説には陥らなかつたことと思はれる。

(註一) Pegue et Maquart, op. cit. p. 304—306.; Mandonnet, La canonisation de Saint Thomas d'Aquin, *Mélanges thomistes*, 1927, p. 31.

(註二) Tocco, *Vita* (ed. Prümmer) c. lvi.

(b) ナポリの謚聖調査の證言提出者であるフォッサノーヴァの修士ピエトロ (Pietro del Castello di Monte San Giovanni) は、自ら目撃したところに基き大約次の如き事實を述べてゐる。

「聖トーマスが最後の病氣に罹つて食慾を失つてゐたとき、彼の伴侶レヂナルドは衰弱を防ぐためもつと食事をとることを勧めた。然し病人は『生の鍊が得られるでせうか』と尋ねるのであつた。『それはアルプスを越えて、イギリスかフランスにでも行かない限り得られないでせう』。トーマスと

レヂナルドとの間にかかる問答が始まつてから、しばし此話題は續いた。その折、ボルドナリウスと言ふ平素この此地方で鰯を商つてゐる男が來た。レヂナルドはその籠をあげさせたところ、生の鰯が一ばい満ちてゐた。……それを買ひ求めて私(ビエトロ修士を指す―筆者)もトーマスも、またそこに居合せた多數の人々も皆これを食べた(註一)。

トッコは右の證言を知らざるものの如く、この證據力のより強い目撃者の證言を採らず、證據力のより薄弱な巷説を根據としてとり入れてゐる。即ち彼によれば、鰯のことに就てトーマスと話を交したのも、またかの魚商人を呼びとめて魚籠をあげさせたのもレヂナルド・ダ・ビエルノではなく、ビエルノの醫者と言ふことになつてゐる。またトッコに従へばトーマスは鰯に手をつけて居らず、ダヴィドに倣ひこれを犠牲として神に捧げたことになつてゐる(註二)。これ等の事實はトッコが謚聖調査を讀まなかつたものとしなければ理解し難い。

(註一) Processus, n. 50.

(註二) Processus, n. 9; Tocco, Vita (Prümmer) C. LV.

トッコが謚聖調査を利用しなかつた事實の論證は右の程度にとどめておく。然し茲に注意して置きたいことは、トッコが右の調査に記された證人中の幾人かと個人的に面接して證言の反覆を依頼したことである。即ちトッコは上記證人の多くを個人的に知つてゐたから、ナポリの謚聖調査の好機を利

用して彼等の或者より個人的に報道を得、以て當時執筆中のトーマス傳の資料を豊富にする事が出来たのである。

二 トロメオ・ダ・ルッカが、其著 *Breves Annales* 1303—1306 及び *Historia Ecclesiastica* 1312—1317 に於て、トーマスの傳記を取扱つたことに關しては既に述べた（前掲記念論文集一六九—一七四頁）。トロメオの舊友トッコがこの *Historia* の存在を知らなかつた筈はないやうに思はれる。それは「トーマス修士の教へ子で、彼の聖者性の敘述に多くの紙幅を割いた……………トロメオ修士」云々（……………a Fr. Tholomeo …… qui fuit studens Fr. Thomae, et multa de ejus sanctitate scripsit.）（註一）と云ふトッコ自身の言葉によつても想像することが出来る。然し此の句自身がまたトッコによつてトロメオの著述が讀まれたか否かを疑はしめる基ともなる。蓋し、トロメオはトーマスの生活を廣範圍にわたつて取扱ひ、彼の聖者性そのものに就ては僅かより書いてゐないからである。尤も彼の記述中のあるもの（例へば奇蹟）は、或る條件の下に於てトーマスの聖者たることを證明するに役立つ。故にトッコが「聖者性」なる言葉を非常に廣い意味に使つてゐたと考へられぬこともない。いづれにしても此の點明瞭を缺き、彼がトロメオの著述を讀んだことを積極的に證明する根據とはならない。

のみならずトロメオの著述とトッコの著述とは、例へば次の如き點に於て一致を缺いてゐる。即ちトロメオに従へば、レデナルドが聖アグネスの傳達によつて病氣の平癒を祈つたとき、トーマスも病

氣であつた(註二)。ところがトロメオより此話を聞いたトッコによれば、トーマスは病氣ではなかつたやうになつてゐる(註三)。またトロメオがデ・アプルシオ修士(Fr. de Aprutio)の名を以て呼んでゐる人物(註四)を、トッコはパウルス・デ・アクイラ修士(Fr. Paulus de Aquila)と言つてゐる(註五)。其他にも微細なる點について兩者の間に喰ひ違を見る。これ等は、トッコがトロメオの話を、後日記憶をたどつてその「トーマス傳」中に追記したものでなからうか。少くもトッコが執筆に際し、トロメオの著述を参照しなかつたことは事實である。

(註一) Processus, n. 60.

(註二) Ptolemeus Lucensis, Historia Ecclesiastica, Lib. XXIII, Cap. X. タウリサーンが、ヴァティカーノの圖書館所藏の Codex 中最も正確なバルベリーノの Codex によつて確め、更に疑はしい箇所を十五世紀筆寫のキーンの Codex 及び十七世紀に一四三七年の手寫本より寫したものに當つて確立したテキストに依る(Taurisano, op. cit. p. 185)。

(註三) ibid.; Tocco, Vita (Prümmer) C. L.; Pelster, op. cit. S. 388 f.

(註四) Ptolemeus, op. cit. Lib. XXIII, Cap IX (Taurisano, op. cit. p. 184.)

(註五) Tocco, Vita (Prümmer) C. LX.

三 エンドレス(Joseph A. Endres)はトッコがミルナル・グイドニス(Thomas von Milnar)のトーマス傳を基礎として利用したことを主張した(註一)。然し古い時代よりの傳統的定説によれば、トッコがグイドニスを利用したのでなく、反つてグイドニス(Thomas von Milnar)がトッコを利用したことになつてゐる。この定説はエンドレス以後

に於ても覆らなかつた。この問題は他日トッコ、ガイドニス、及びカロの三傳記作家間に於ける *Priorität* 及び依存性を取扱ふ際に詳論したいと思ふ。

四 トッコがジェラルド・ド・フラッシェの *Vita Fratrum*、及びトーマス・カンティプラタヌスの *Bonum Universale* (前掲記念論文集一六七—一六九頁参照) を利用したといふ假説に就ては未だ確證があがつてゐない。然しジャンスオンの言ふ如く、少くも前者はトッコによつて讀まれたものと思ふ。蓋し本書は、初期ドミニコ會のオフィツシアルな編年史とも言ふべきもので、ドミニコ會修道院には必ず備へつけられてゐたものと思はれるからである。殊にトッコの滞在してゐたナポリやアヴィニオンに於ては、容易に之を讀むことが出來た筈である(註二)。

以上述べたところにより、トッコの「聖トーマス・アクィナス傳」の源泉はほぼ明になつたことと信ずる。私は次にこの源泉と、別に述べたトッコ小傳等を基礎として、トッコの著述の傳記的價值評量を試みたいと思ふのである。然し紙幅の關係上遺憾ながら之を次の機會に譲ることとした。

(註一) Endres, Studien zur Biographie des hl. Thomas von Aquin, I. Art. Historisches Jahrbuch XXIX, 1908.

(註二) Janssens, Les premiers historiens de la vie de S. Thomas. Revue Neo-Scholastique, 1924, p. 466.